

活動センターだより

2012年度 第1号 (8月25日発行)

2011年6月～2011年12月プログラム報告

2011年度 開発教育セミナー 第2回

「開発教育入門セミナー パートⅡ ～ 実践編 ～」

2011年6月18日(土)16:00～19日(日)12:00

講師：関西セミナーハウス活動センター 開発教育研究会 山中信幸、織田雪江

5月8日に開催された開発教育入門セミナーの続編として、6月18～19日に開発と多文化共生をテーマにした「パートⅡ 実践編」を実施しました。

第1セッションは「貿易ゲーム インドネシアバージョン」でした。最初に、パームオイルや石油、アルミや香辛料などから、私たちの生活とインドネシアが様々なつながりに気づきました。その後、インドネシアの経済格差の問題について話し合い、「貿易ゲーム」を通して、経済格差が拡大していく仕組みを疑似体験しました。

第2セッションでは、インドネシアの都市再開発に関するロールプレイを体験し、望ましい開発のあり方や「豊かさ」について考えました。そして最後に「貿易ゲー

ム」と「ロールプレイ ジャカルタの都市再開発」の教材について検討しました。

第3セッションは教材「日系アメリカ人の文化・歴史・市民権から学ぶー多様な人々が暮らすハワイからー」を使ったワークショップでした。最初に、「ハワイ」の観光パンフレットを用いてコラージュを作成することで、私たちの「ハワイ」に対するイメージを確認しました。次に、『ヒマラヤ杉に降る雪』『Japanese Relocation』という2つの映像を観て、日系アメリカ人とアメリカ政府広報担当者の2つの立場でニュース原稿を考え、強制退去命令の描かれ方を比較しました。その後、在日外国人に対する戦後補償と社会保障の資料を用いて日本社会をふりかえりました。そして最後に、この教材についての検討を行いました。

参加者は少なかつたものの、参加者の参加意識は高く、紹介した教材からNGOや学校現場での実践につなげることのできる気づきを分かち合うことができました。(山中信幸 柳学園中学・高等学校教諭)



《参加者アンケートから》

- ・ 開発教育の本などは読んできましたが、貿易ゲームを実際にやってみるのは初めてだったので、体験できて良かったです。実際に取り組んでおられる方の様々な工夫や伝え方のこだわりにもたくさん触れられました。
- ・ ゲーム形式で、体験したことが学びにつながることは、とてもおもしろい！と実感しました。コラージュを使用した授業作り、流れを参考にさせていただきたいと思っています。
- ・ 興味のある内容ばかりで、自然と積極的に参加していました。

「71年間ハンセン病療養所に生きて」

2011年7月9日（土）13:30～17:00

講師：上野 正子（国立療養所星塚敬愛園入所者）

講師にお招きした上野正子さんは、ハンセン病国家賠償訴訟に立ち上がった13人の第一次原告の1人ですが、闘う人というイメージからは程遠く、天真爛漫で明るい元気なおばあちゃんです。



沖縄八重山諸

島で生まれ、沖縄県立第二女学校に進学、教師への夢をもって励んでいた13歳のとき、下肢にできた赤い斑点の精密検査のため鹿児島鹿屋市にある敬愛園に父親に連れられてやってきました。敬愛園と言っただけで、タクシーには乗せてもらえず、園では職員に、水の入ったコップを触ることを禁じられるなど、ハンセン病に対する残酷な差別を受ける生活が始まりました。父親は正子さんを置いて黙って去ります。親の胸中を知ることなく、正子さんは捨てられたと父親をずっとうらみました。

療養所は、1996年になってやっと廃止された、考えられないような人権無視の「らい予防法」によって運営されていました。一旦入ると出ることができない一方通行の不思議な法律です。

園では、須山八重子という偽名が与えられました。1998年ハンセン病国家賠償訴訟第一次原告の13人の1人として立ち、2001年勝訴した日、「正直に生きなさい」と父親がつけてくれた本名をやっと取り戻しました。療養所での生活は、病気療養する場とはほど遠く、あらゆる労働

が強制されました。重症の患者の看病も軽症の患者の仕事でした。18歳で園内結婚した正子さんが住むことになったのは、しきりもカーテンもない12畳に4組の夫婦がいっしょに住む「夫婦舎」でした。新婚の夜、夫より渡されたものは、血とヨードチンキで染まった下着でした。正子さんには知らせないで、子供を産めないように断種手術がされていたのです。国賠訴訟の原告になる決心をしたのは、子供を持つという人間として当たり前の幸せを否定されたことを、どうしても赦せなかったからです。病気は完治しているのに「らい予防法」のために、社会復帰も果たせませんでした。

わたしたちが経済成長を謳歌していた時代にも、正子さんたちは、療養所の中だけで生きることを強要されていたのです。今となっては、子供もなく歳もとってしまって、社会復帰はできません。一度、社会で普通の生活がしてみたかったという言葉には、万感の思いがこもっていました。

今、正子さんの伝えたいことは、出会いが人を動かすこと、信じることに真正面から向かって生きることのすばらしさです。想像を絶する過酷な話の連続でしたが、聞くわたしたちは、正子さんのユーモアと元気さに、救われた思いがしました。（橘 俣子 医師）



《参加者アンケートから》

- ・71年間の真実を聞かせていただけたこと。知らなかったことばかりでした。進め方がとても素晴らしく、よくわかりました。 ・上野さんのありのままの明るさ、温かさが伝わった。
- ・自分に誇りをもち、筋の通った生き方は、大切だと思いました。そこが、人間を明るくしていくと思います。生きるヒントをもらえたことが、よかったです。
- ・どうしてそんなに永い間・・・と涙がこぼれました。

「食とグローバルゼーション～日本の農業を考える～」

2011年7月23日(土)16:00～24日(日)12:00

講師：大野 和興（アジア農民交流センター世話人）

「TPPとは一体何なのだろうか？貿易の自由化がさらに進むとどのようなことが起こるのだろうか？」このような疑問から、今回のセミナーでは、長年ジャーナリストとして各地の農村を歩き、その現実と国の政策、グローバル化等に関して考え、行動してこられた大野和興さんを講師として私たちの暮らしについて考えた。

セッション1では、参加者が自己紹介とともに自分と農業との関わりについて意見交流をし、その後グループに分かれ、農村での聞き取りを元にしたワークを通して、戦後の農業の流れや農業政策について考えた。

セッション2、3では、日米関係と農業問題、グローバルゼーションと貿易の自由化、そして、3・11の震災から考える私たちの暮らしについて、大野さんからの幅広いお話を元にして参加者が意見を出し合った。今回のセミナーのテーマとしたTPP（環太

平洋連携協定）や貿易の自由化を考える上で、国内または世界におけるさまざまな課題（食料、エネルギー、労働、平和、人権・・・）はつながっていて、それらを結び合わせて広い視野で考えていかなければならないということが強く印象に残った。



かつての農村では、「百姓」は、何でもできる人であったと言う。米、野菜を生産するだけではなく、わらじ米俵、農具など生活道具、肥料、木炭と生活に関わるあらゆる物を自分たちの手を使って

作り出していた。現在の日本では貧困化が進み、その上、震災を受けたことにより、経済の立て直しが早急の課題として取り上げられている。しかし、「本当に貧しいのか」「貧しさや豊かさは何を基準としているのか」ということを今一度見直し、「生命を守る」という視点から、現在の利潤を求めるばかりのライフスタイルを見直したい。そしてそこから、社会の構造を変えていくためにそれぞれが何ができるのかを考え、行動していきたい。

友前尚子（南丹市立園部第二小学校教諭）



《参加者アンケートから》

- ・受講生からの質問にも即座的確な説明がなされ、目から鱗が落ちる部分も多かった。また単にTPPの話にとどまらず、その背景になる様々な話がきけたのは有難かった。
- ・いろんなことがつながっていることや、問題意識をもつこと、「知ること」の大切さを実感させてもらいました。
- ・お金におきかえられない農村の価値と百姓の技術について、注目していきたい。
- ・他の参加者との意見交換も楽しめました。

2011年度 修学院フォーラム「人と教育」 第2回

「仲間とつながりあって、ハッピーに生きようぜ！」

2011年9月17日(土) 13:30～17:30

講師：金森 俊朗（北陸学院大学人間総合学部教授）

金森先生は、今の日本の社会に共通のこととして「自尊心の低さ」を指摘し、ニュース番組で放送された教育実践の13分間のダイジェスト版を視聴しながら、一人のこどもの作文を紹介された。

「私はとっても勉強ができない。私はいつもいつも、私はバカだと思ってしまう。勉強だけだったら、ちょっといいと思ったけど、私は運動もできない。とび箱だって私はちょっとしかできない。でも、それだけだったらまだよかったかもしれない。」この子は習い事についても親からぼろくそに言われていた。「・・・勉強も運動もならいごとも何のとりえもない私がだんだん情けなくなった。・・・こんな、何もできない私は、自分が憎い。」

「とりえ」は、本来、人格に関わる事柄であるはずなのに、この作文では、勉強、スポーツ、習い事などの能力に関わることとして捉えられている。早期教育は、こどもに対する「投資」であるから、こどもにプレッシャーを与え、親の期待に応えられないこどもは「自分が憎い」と言うまでに追い詰められる。

OECD加盟国対象のこどもの幸福度調査によれば、自分を孤独と感じているこども

の割合は、日本が30%で、2位のアイスランドの10%を引き離してダントツで1位である。ここでいう孤独とは、一人ぼっちという意味ではなく、誰からもあてにされない、という意味なのだ、と指摘された。

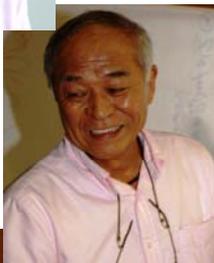
先ほどの作文のこどもの場合、作文に綴る表現力を持ち、つらい気持ちに共感してもらえる仲間の存在があった。すなわち、聞いてもらえるという信頼関係があった。思いのたけを表現すること、それを受け止める仲間がいること、そのための関係が築かれていること、その重要さを語られた。

そのために、毎年クラスが始まる4月の最初から関係性を築く実践、仲間に伝えたいことを朝から話せることを大切にする実践を積み重ねて来たことが話された。

休憩後の話し合いも活発になされた。学校が「訓練化」されており、感情を思いっきり出す教育、表現力を育む教育が抜けていること、また、教師に余裕が失われ、教師が人間を鋭くしなやかに見るための文化を豊かに読むことが希薄になり、人間を見るための「哲学」が欠落しつつあるとの指摘が、特に印象に残った。

学校教育、こどもの育ちの課題と共に、私たちの生きる社会の課題について、考えを深める時となった。

(西岡裕芳 日本基督教団京都葵教会牧師)



《参加者アンケートから》

- ・まわりの人と本音で関わりあっておられる姿に心を打たれました。進級時の様子が心に響きました。
- ・自分の主張をしても受け入れてもらえる関係づくりが素晴らしいです。
- ・学校でくらす時間が多い子どもたちと先生とが、心の交わりがもてることで、子どもたちが、解放されていると感じました。

2011年度 開発教育セミナー 第4回

「～フィールドスタディ～」

炭坑労働者のくらしと 歴史を学ぶ旅 in 筑豊」

2011年9月17日(土)13:30～18日(日)16:00

講師： 犬養 光博 (前日本キリスト教団福吉伝道所牧師)

講師の犬養光博先生は、この4月に筑豊の炭住に開いた福音伝道所を閉じられるまで46年間、この地で活動を続けて来られた。「在日」の慰霊碑めぐりでは、碑に刻まれた「在日」の呼称や彼らの背景についての記載の違いを学んだ。また無数の小さな石だけで弔われていた墓地もあり、わたしたちが「在日」の人たちとどのように向き合ってきたのか考えさせられた。また碑に刻まれた亡くなられた人の数から、数字の背景を想像することの大切さを学んだ。慰霊碑本来の意味を考え、毎回、黙祷の時を持ったことは、それぞれが自分自身と向き合う時間にもなったと思う。田川市石炭記念資料館は三井田川の繁栄の歴史を記したもののだが、犬養先生の案内によって異なる視点から見る事ができた。田川市や飯塚市のインフラが整った町の様子は、「鉱害対策事業」や生活保護によるものと知り、米軍基地や原発に依存させられた経済のように、地域の自立の難しさを感じた。

現場を訪れて事柄として学ぶことも大事だが、自分の現場で、自分には越えられない限界があることを認識しながら、問題を抱える人たちとつきあっていくことが大切なのだという犬養先生の話から、参加者それぞれが今後、自分の関わる現場でどのようなはたらきをしていくのか、課題を持って帰路についた有意義なフィールドスタディとなった。

(織田 雪江 同志社中学・高等学校教諭)



《参加者アンケートから》

- ・とても丁寧な説明で分かりやすかったと思う。各慰霊碑前で黙祷できたのも良かった。黙祷、この時、いろいろなことを考えたりしました。「分かる」ことから一歩進んで「自分を変える」「生活を変える」大切さを学べた。
- ・犬養さんのお話は、とてもよかったです。犬養さんのような生き方をされている方に出会い、実際にお話をうかがえたことがよかったです。そして、現地に実際に行ってみるということの大切さを改めて感じました。現地に行ってみるからこそ、実際に出会ってみるからこそ、分かること、感じることがあるので、フィールドスタディはいいものだと思えました。
- ・筑豊のこと、そこで、在日一世の人々が、底辺を支えていたこと。今回初めて知りました。朝鮮半島と日本が、よい関係を築いていくためには、互いに歴史を正しく知る事が大切だし、一世の人たちの足どりを学ぶことが、足元の国際化につながるのだと思いました。

2011年度 神学生交流会 第2回

「現代日本におけるキリスト者の可能性」

2011年10月8日(土) 13:30～17:00

師：関谷 直人 (同志社大学神学部教授)

会に先立ちセミナーハウス職員の奉仕による昼食会を持った。澄み渡る秋空の下、2階テラスで猪肉等のバーベキューを楽しんだ。その後、茶室「清心庵」に場所を移し、同志社大学神学部の学生5人、関西学院



大学神学部の学生3人に、神学に関心のある中国からのゲストお一人を交えて行われた。

関谷先生の講演は、「神学するとはどういうことか」と題されて、ご自分の個人史を中心に、神学をするというこ

とは、一言で言えばlookとseeの違いで、目に見える事象としては人の語りかけであったり、思いがけない出来事であったりするが、それらを神様の導きとして理解する時に「意味」とか「愛」を感じて、自分にとって大切な事柄として理解するようになる。聖書の記事と自分の出来事を重ねて理解する時に、信仰が遠い昔の話ではなく自分の事柄として理解できるようになり、喜びや希望を共感的に受けとめることが出来るようになる、そういう作業をすることが神学をするということであると話された。若い神学生にとって、身近に

理解できる良い話であったと思われる。

このような交流が継続されて、学校を超えて神学をする友人が出来ることは、キリスト教界の発展にも有益なものとなる。

(春名 康範 日本基督教団天満教会牧師)



2011年度 お茶のこころと宗教のこころ 第2回

「高山右近の生涯とその列福運動について」

2011年10月17日 (月) 13:30 ~ 17:00

講師：天田 茂 (キリシタン文化研究会)

最近NHKの歴史秘話ヒストリアで「絶対に裏切らない武将」として紹介された高山右近は、日本でより、むしろフィリピンやヨーロッパでよく知られており、右近像がマニラ市パコ広場にあり、スペインのバルセロナ聖イグナシオ洞窟聖堂には、モザイク画の中に右近が描かれています。現在、

右近没後400年記念に合わせて、列福を目



指した運動が始まっています。

高山右近は、時代を動かした有力武将であり、領民の厚い信頼を集めていました。大名になってからも貧民の葬式の棺を自ら担いだという逸話が伝えられています。また築城術に優れ、洗練された文化人、茶人でもありました。キリシタンが禁じられてからも棄教せず、領地を召し上げられたため、流浪生活をした後、前田藩にかくまわ

れ26年間を金沢で過ごしました。キリシタン国外追放の命令により右近は長崎を経てマニラに送られます。その途中30名を越す一行が、大津の坂本に30日間滞在したことが分かっています。坂本は、講師の天田氏の郷里で、どこに滞在したのかを、当時の生の資料に当たって深く研究しておられます。坂本の新町にあった遊郭ではなかったかというのは大変興味ある説だと思いました。



京都には、非常に多くの信者がおり教会もありましたが、豊臣秀吉、徳川幕府のキリシタン迫害は徹底的で、破壊は根こそぎ

であったため、京都のキリシタンの足跡はほとんど残されていません。長崎で殉教した26聖人の多く



も京都の信者でした。元和の京都の大殉教では、六条河原で11人の子どもを含む52人の信者が十字架に縛られて火あぶりにされました。世界のキリスト教の歴史の中でも、短期間に5万人（一説には20万人）もの殉教者を出した国はありません。この悲劇の頂点にいた人として高山右近をとらえ直したいと話されました。

（橘 俣子）

《参加者アンケートから》

- ・信仰が迫害された時代においても、善と正義をつらぬいた右近について、深く知ることができた。
- ・実証的な話で、その努力が伝わってきた。歴史を解明することの意義を改めて知ることができた。
- ・右近を身近に知ることが出来たこと。
- ・お茶もよかった。

2011年度 開発教育セミナー 第5回

「「ありのままのわたしをいきる」ために～多様な性と生～」

2011年10月29日(土)16:00～30日(日)12:00

講師：土肥 いつき（セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表）

これまで開発教育は、セクシュアリティを女性と男性に二分することを前提にそれぞれの社会的な不利益を課題に取り上げてきました。しかし、数年来、それに違和感を感じる人々によって、多様なセクシュアリティのありようが提案されてきました。



そこで、今回はトランスジェンダーなどセクシュアルマイノリティといわれる当事者の視点から、自分と社会を見直すことをねらいにセミナーを開催しました。

第1セッションは、参加者が今回のテーマと自分との関わりを語ることから始まりました。続いて、講師の土肥さんがトランスジェンダーとしての自分と長い時間をかけて向き合ってきたライフストーリーに耳を傾けました。自分の身体的な性とのズレを感じたとき、心の中に箱を置き、そこにしまいむことで日常を生きていたこと。同僚のすすめで読んだ1冊の本がきっかけで自分に気づいたこと。また、基本的な理解として、①身体的な性 ②性自認 ③社会的な性 ④性的指向の違いはグラディエーションで、セクシュアリティは幾通りもの組み合わせでできていることなど。話しぶりから、「謙一郎さん」のときも、「いつきさん」である今も、明るく前向きで

繊細なところは変わってないのだろうと、土肥さんの人をひきつける力を感じました。

第2セッションでは、「部屋の四隅」を通して、「心の箱はだれかに見せた方がいい」、「体育は男女一緒にやるべきだ」など、話し合いが生き方や学校システムに広がりました。この後、話とともに、「ハートをつなごう」（NHK）を試聴し、土肥さんの家族とのありように気づきました。また、これまで教員として出会ってきた在日コリアンや被差別部落の生徒や地域の人たちとのやりとりが当事者としての生き方を支えていることにも気づきました。



第3セッションでは、海外でさまざまな性生きる当事者たちを写し出した写真を用いてフォトランゲージをしました。写真のカップルたちは愛情や信頼をくらしとして形作り、私たちが日本の社会でやるべきことを示唆していました。参加者それぞれの疑問を土肥さんに投げかけ、じっくり学び、認識を深める機会となりました。

（丸山 まり子 平群町立平群北小学校教諭）

《参加者アンケートから》

- ・知りたい、理解できればとおもっていたが、なかなか機会がなかったので、じっくり話せて、何でも質問できてよかった。認識が深まったこともあったし、自分にできること、どうしていくかについても考えられた。
- ・性別を日常的に使っていること。男らしさ、女らしさって何か等々、普段ゆっくり立ちどまれなかったことや、改めて見つめなおしたいことに気づけた。

2011年度 修学院フォーラム「いのちを考える」 第3回

「いのちについて—キリスト教倫理と一般倫理のはざまから—」

2011年7月9日（土）13:30～17:00

講師：関根 清三（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授）

今日の社会において問題となる「いのち」について、キリスト教の視点から考えを深める必要は多くのクリスチャンが感じるところである。今回の「はなしあい」はその礎石のひとつとなる内容となった。

関根先生のお話しの内容は、いのちを主題として従来のキリスト教倫理の脱構築をはかり、一般倫理の次元から見ても説得的なキリスト教倫理の可能性を提示するものであった。

まず旧約の人間創造論について従来の霊肉一元論的解釈を退け、あくまでも肉体としての人間の創造を語るものとして解釈し、肉体のいのちが神によって創造された点を強調する。ここから殺人は神によるいのちの贈与を否定するものとして禁ずるのがキリスト教倫理となるが、純粋な贈与においては贈与者が

「隠れている」必要があることから従来の人格神的理解を超え、純粋な贈与として「いのち」というものの有難さのみを語ることのうちに、キリスト教倫理の脱構築のひとつを認める。また新約聖書については無差別の愛といのちの連関を指摘して、神の国、贖罪論、復活理解を論じ、新約聖書が魂のいのちを語る点を強調する。とくに罪の赦しについては心の奥の秘められた所、人が罪を隠し持つ場所において赦しの神との出会いが成立し、そこで出会われる愛に満ちた赦しの神との関係において魂のいのちが自覚されると解釈する。

ご講演は哲学的な面も強かったが、旧約と新約の双方について大変丁寧に話してくださいだったので、決して難解なものではなく、論旨も明快であった。質疑では赦しの問題、死刑、ホスピス、自殺、社会福祉なども話題となった。時間の過ぎるのが惜しまれる話し合いの時となった。

（土井健司 関西学院大学神学部教授）



《参加者アンケートから》

- ・ 外に開かれた語りで、キリスト教倫理をとらえるひとつの方法が知り得たこと。
- ・ むずかしい内容でしたが、大変意義深くわかり易くきくことができました。
- ・ 「純粋な贈与」と聖書のことについて、いろいろ考えさせられました。「宗教」と「哲学」の緊張を最後に言われたことも印象に残りました。
- ・ 所与性、所奪性に共観できた。
- ・ レジメだけでも、大変素晴らしい内容だったし、話し合いも内容を深めるものだった。

「知の塵芥のなかで、自分をつくる」

2011年11月12日（土）13:30～17:30

講師：野田 正彰（関西学院大学教授）



講師の野田先生は、最初に、「多くの人々は、『自分は学校教育とは無関係に自己形成をしてきた』と考えるが、戦前の皇民化教育の影響が明らかであるように、人間の自己形成と教育の関係を考えてみるこ

が必要ではないか」と問いかけられた。

続いて、アジア・太平洋戦争後の教育の流れを、自分史を振り返りながら辿っていった。

教育基本法を制定するための教育刷新委員会の記録を見ると、委員の務台理作は、「人格の完成」に関する議論の中で、「そういう倫理的な言葉は使わないで、やはり個人ということが大事だと思う」「個人の尊厳とか価値を呪縛しないこと、個人を犠牲にせず、個人の自由をあくまで尊重する精神が教育の精神の基礎とならなければならない」「近代的な意味で、本当に公に仕えるためには、個人という意識を確立しなければならない」「西洋のような個人意識を確立した上で公にいかない、今すぐにでも反動化する」と語っている。しかし、この議論は多くの人々に理解されなかったのではないかと語られた。「皇民化教育が終わった」というだけの認識だったのではないかと語られた。1950年の文部省編纂教科書『民主主義』では、戦争への言及はたった一か所であり、他方で「日本は資源

がない国だから、勤勉に働いて繁栄を築かなければならない」との記述があるが、これは、戦後民主主義を見事に表現しており、国家を強くするための教育を問うことは、戦後もなかった、と語られた。

また、精神医学を学び、病気で傷つく人々を治療しながら、気づかされたことについて語られた。すなわち、人間は自分の中に経験を積んだ価値観とか自己像を引きずりながら生きている。それは文化が形成したものであるし、文化がいろいろな判断の根拠を形作っている。そこから、文化が違えば人は、どのような悩みを持つのか、苦しみ方をするのかという研究をするようになった、と語られた。

更に、30代半ば、自分の国の近代の歴史について、どのような戦争を行ってきたのか、どのような戦争を行う社会であるのか、についてほとんど知らないことに気が付き、戦争と戦争に関わった人々の精神の研究をしてきた。その中で、自分自身大変歪んだ教育を受けて来たのだと思うようになった、と語られた。

その他、話し合いの時間にかけて、大阪の教育基本条例案のこと、震災のこと、ジャーナリズムのこと、日欧における戦争責任や個と公共性の関係の違いなど多岐にわたって話し合いを行うことができた。

文化とその社会に生きる人間像との関わりについて、深く考えさせられるプログラムであった。
(西岡 裕芳)

《参加者アンケートから》

- ・ 政治の責任、延いては私の責任と改めて思います。時の流れに身を流され、日常に追われているためでしょうか。考える糸口に気付かない自分:たとえ違和感を覚えても、どのように考えれば良いかが判っていません。かと言って、根拠のない不確かそうなお話に時間は割けません。先生のような生き方をしたかったと思いました。

2011年度 関西セミナーハウス

「もみじまつり」 <共催：関西セミナーハウス>

2011年11月23日（水・祝）9:00～16:30

（茶席）北風宗照、藤井宗恵、裏千家一字会、（邦楽席）岩堀敬子、
（コンサート）ベルリンガーズD r e a m、（絵画展示）横江智恵子

今年も、恒例の「もみじまつり」がいつものように23日（祝）に開催された。ただし、今年はハウスのどの部屋も22日深夜まで団体客に利用されていたので、いつものように開催するためには、スタッフに特別に準備のための苦労があった。加えて、天気予報は、当日の降水確率を50%と予想していたので、例年食堂前の庭に設定される野点席を、室内の国際ホールに移さなければならなかった。今年は、暑い日が続き、11月に入ってもあまり冷え込まなかったため、もみじの色づきも、今一つであった。

それにもかかわらず、今年も多くの人々が来て下さった。来館者459名、関係者72名、合せて530名であった。

いつものように北風宗照先生、藤井宗恵先生とのお弟子さん、裏千家一字会の方々の奉仕により、和室、お茶室、国際ホールの3か所にお茶席が設けられた。能舞台では、今年も琴の演奏が行われ、参加者は能舞台を囲む庭でそれを楽しんだ。琴の演奏は、昨年まで長年御奉仕くださった生田流箏曲の千



葉由紀子先生とのお弟子さんに代わって、今年も沢井箏曲院の岩堀敬子先生とのお弟子さんが新たに担当して下さいました。

アゴラホールでは、横江智恵子さんの絵画展が開催され、絵に描かれた聖書の中の女性像が、観る人に静かな感銘を与えた。

午後から大会議室では、ベルリンガーズ Dreamの皆様によるハンドベルの演奏が披露された。このグループは、大阪女学院PTAのハンドベルクワイアのOGを中心として発足し、日本各地はもとより外国でも演奏を行っている。演奏曲目は讚美歌から、童謡、民謡にまで幅広くおよび、会場を一杯に満たした

100名以上の聴衆がこれを楽しんだ。

スタッフには、てんてこ舞いで忙しく、疲れの残る1日であったが、おかげで多くの人々がゆっくり楽しむことができた1日であった。

（小久保 正）

2011年度 修学院フォーラム「福祉と聖書のこころ」第1回

「近頃気になる子どものものはなし〜いと小さき子らに導かれ〜」

2011年11月26日（土）14:30～17:00 会場：日本基督教団 洛南教会

講師：高木 恵子（洛西愛育園園長）

今回は、保護者、保育者（園長、職員、幼稚園経営者）が参加し、保育園・幼稚園で「気になる子」の事例をもって講師が講演した。講師は保育園・幼稚園における子どもの



実態、特に「気になる子」の事例を多く把握し、その中



で子育てにおける保護者の苦労や悩みに共感し、全国を駆け回っている。

講演は、保育者・保護者にとってクラス運営、子育ての困

難さなど身近な関心の高い内容となっており、質疑でも、参加者から子育ての悩み、保育方法など積極的な質問・意見があった。

（井上 勇一 日本基督教団洛南教会牧師）

《参加者アンケートから》

- ・ 具体例をあげられ、とても参考になった。
- ・ 気になる子＝すてきな大人にしてあげられるようにという考え方が、とてもプラスになりました。
- ・ 「気になる子ども」だけではなく、日常の保育に役立つ話が多かった。

2011年度 開発教育セミナー 第6回

「原子力の“平和”利用って？～核と原発と温暖化～」

2011年12月23日(土)16:00～24日(日)12:00

講師：小出 裕章（京都大学原子炉実験所）



2010年、ベトナムへの原子力発電所輸出が決まった。温暖化防止のために原発を推進しようというCMも流れていた。CO₂による地球温暖化説を鵜呑みにしていいのか、原

爆の悲惨さを心理解しているはずの日本人がなぜ原発を受け入れてきたのか、などの疑問から今回のセミナーは企画された。ところが、講師に小出裕章さんをお願いした後に福

島第一原発での事故がおこったため、小出さんは超多忙となってしまった。にもかかわらず工夫された資料とプレゼンテーション、そして対話的な語り口と姿勢で、1泊2日のセミナーを充実したものにしてくださった。50人を超える参加者も、全体での議論の時間は持てなかったが、交流会も含めて小出さんの話をたっぷり聞くことができた。

セッション1では、今回学び合いたいことを交流した後、3.11以前と以後の自分をふりかえった。そしてこれまでの原子力について学んだ。核兵器は悪で原子力発電は善と思われてきたが、どちらも同じ原料、同じ原理で作られるものであり、軍事利用と平和利用と

の境目はない。核実験も原発もそれを必要とする中心都市ではなく過疎地に押しつけられ、ウラン採掘にはじまって施設の定期点検にいたるまで被曝者を生み、いずれも100万年に及ぶ核廃物の保管を次世代に強いるという不平等性を持つことを理解した。セッション2では、現在の原子力、特に福島に焦点をあてて考えた。原発事故で避難する人々の姿は、世界の難民と重なる。そして1954年のビキニ水爆実験に遭遇した第五福竜丸の人々、パニックとなった日本での風評被害もまた今と重なる。小出さんはチェルノブイリを例にとりながら事故が突き付けてくる問題をあげ、原子力を選んだおとなが責任を持って責任のない子どもを守ることを強調した。

翌日のセッション3では、これからの原子力について考えた。小出さんは、温暖化防止と称して原発をもってくること自体の違い

を指摘し、原子力発電所がなくてもその他の発電で代替可能なことを語った。右肩上がりの成長に期待することなく、エネルギー多消費の暮らしを見直すことの大切さを確認できた。最後に、自分ができることを紙に書いて張り出した。そこには、それぞれの職場で、家庭で、自分の頭で考えて正しいと思うことをやっつけていこうという文字が残っていた。

(金山頤子 京都府立桃山高等学校教諭)



《参加者アンケートから》

- ・核と原子力の共通性がとてもよく分かった。
- ・原発の問題は、貧困、差別(基地や迷惑施設の押しつけ)、人権、グローバリズム、多岐にわたる問題にリンクしていると思います。3・11以後の日本人にとって、これらをどう自分自身の事として、つなげあわせて考え、行動していけるかが、問われている気がします。
- ・原発を即刻止められない理由がわかりました。しかし、人類の未来、子どもたちの将来と交換することはできないので、原発は止めてほしいし、又、そのための行動をしなければと思います。エネルギーの未来についても真剣に考えようと思います。

2012年度 これからの主催・共催プログラム

- 神学生交流会 第2回10月6日(土)
- 修学院フォーラム「エネルギーを考える」 10月7日(日)～8日(月)
- 開発教育セミナー 第3回9月15日～16日、第4回10月13日～14日、第5回11月10日～11日、第6回12月8日～9日(いずれも土日)
- 修学院フォーラム「高齢を生きる」—認知症・胃ろう・尊厳死を見据えて— 第2回10月27日(土)、第3回12月15日(土)、第4回2013年1月19日
- お茶のこころと宗教のこころ 第2回11月5日(月)
- もみじまつり 11月23日(金・祝)
- 神学生交流プログラム 2013年3月25日～27日



東日本大震災から2度目の夏です。被災地の復興にはもちろんのこと、原発事故の影響の広さ、收拾の難しさに目をそらさずにいたいものです。改めて日常生活を守ることのかけがえのなさを心に刻みたいと思います。節電や、新エネルギーの開発に多くの知恵が集まりますように。

当センターの活動にも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。(編集子)

発行人：小久保 正 (関西セミナーハウス活動センター運営委員長)

発行所：(財)日本クリスチャン・アカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23 電話:075-711-2117 FAX:075-701-5256

E-メール: office@academy-kansai.org ウェブページ: http://www.academy-kansai.org/